

天城 奎二（あまぎ・けいじ）

1、プロフィール

詩人、宗教哲学者として、独自の思想的深さを湛えた詩作を続けた。木原孝一らの詩誌「架橋」同人を経て、鎗田清太郎、長谷川龍生、辻井喬らの詩誌「火牛」同人として生涯を終える。

<生没>

1930(昭和5)年1月27日～1995(平成7)年10月23日

<代表作>

詩集『薔薇窓』

<青森との関わり>

青森県庁に勤務し、生涯の大部分をこの地で過ごした。青森県詩人連盟など県内詩関係の結社と交わり、東奥日報などの新聞や雑誌に評論や詩評を掲載して県詩壇に影響を与えた。

2、作家解説

本名小笠原一麻、昭和5年(1930)函館市生まれ。塚本虎二の無教会派の信徒であった父の影響で、少年時代から聖書に親しむ。敗戦後は、ヘーゲル左派の哲学者マックス・シュティルナーの「唯一者としての我」という実存主義的かつアナキズム的思想に深い影響を受け、労働運動を行うが、個人主義的限界を感じ、マルクシズム、さらにキルケゴールの宗教的実存や北森嘉蔵の「神の痛みの哲学」に近づき、プロテスタント教会で受洗するが、なおこのマルクシズムと宗教的実存というふたつの立場の相克に苦しみ、独自の思想を模索し始める。(以上、主として天城奎二詩集『薔薇窓』(詩学社)の後書きから。氏の出自、経歴については別のデータもあるが、これはあくまでも詩人としての氏の自己確認であり、またそれ以上に語ろうとしないのが、本人の意思である。「冷ややかな空気の中で薔薇は凜と生きている／薔薇はその境遇を語ることはない」<冬薔薇>)

あたかも氏の詩人としての総決算のように、死の直前によく出版された唯一の詩集『薔薇窓』の一篇<「雨の樹」を聴く>の、「渦紋を毘のように内へ内へと絞ってゆき／更に緻密になり、遂には悲痛な芯に触れ／風に向かって慟哭する樹の姿がある」こそ、氏の真実で唯一正確な魂の自画像である。そして月見野靈園の黒石に彫られた生前自選の墓碑銘、英国詩人ワーズワースの句「誇りの中に潰（つい）えし眠りなき魂」こそは、氏の生涯の不屈の精神的苦闘を象徴する。

その孤高の詩歴を簡単に記す。詩誌「詩学」「詩と思想」などに詩を発表し、木原孝一らの「架橋」同人、さらに昭和 63 年（1988）年から「火牛」同人となる。

氏がその生涯の最後に属していた唯一の詩誌「火牛」は、日本でも最高水準の詩誌のひとつであって、同人には主宰の鎗田清太郎の他、長谷川龍生、辻井喬など一流の詩人が名を連ねる。東北六県からは、氏の他に小笠原茂介が属しているのみ。

氏の没後翌年に開かれた東京・神楽坂での「火牛」同人合同出版記念会でも、同人や来賓各氏の、詩人天城奎二の、我が国には希な思想的骨格をもった非凡な詩才への賛辞とその早世への哀惜の辞があいつぎ、さながら氏への葬礼のようであった。

嵯峨信之は、以前から氏を「幻の大詩人」と称していたが、地方にあって寡作、かつ孤高の姿を保っていることをそう表現したのであろう。嶋岡晨は田村隆一『狐の手袋』を老衰の遊び心と切って捨てたその対極として、『薔薇窓』の厳しい社会認識、痛ましい疎外意識に、得難い宗教的崇高感を見ている（東京新聞・平成7月7月 25 日夕刊）。「その詩のヘルダーリン的な格調の高さ、恐るべき博識と多彩な語彙、求道者的詩人像」（鎗田清太郎の『薔薇窓』跋）は、また多くの詩人の一致して認めるところであろう。

3、資料紹介

○詩集『薔薇窓』

図書

1995（平成7）年6月 30 日

216 mm × 158 mm

死の直前によく出版された唯一の詩集。その一篇<「雨の樹」を聴く>の、「・・・内へ内へと絞ってゆき／・・・遂には悲痛な芯に触れ／風に向かって慟哭する樹の姿」こそ、氏の生涯の深刻で真実な精神的苦闘を象徴する魂の自画像。